

社会科における「言語活動の充実」に向けて

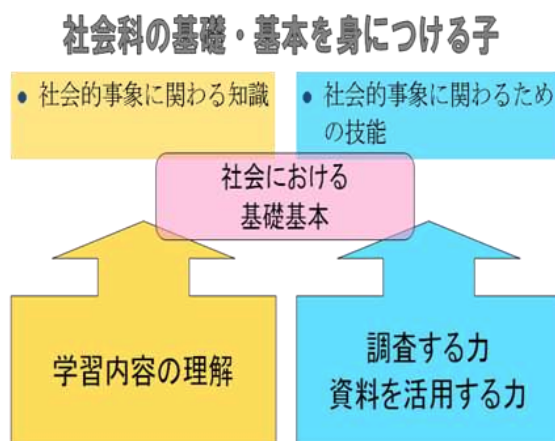
【視点1】「基礎的・基本的な知識及び技能を明確にし、確かな習得を図る」とともに、「思考力・判断力・表現力の育成を図る」意図的・計画的な言語活動を位置づけた単元構成と単元の評価の在り方

《社会科における基礎・基本について》

社会科という教科の前提として、社会科は「内容教科」であるという点をおさえるべきである。問題解決学習のなかで子ども達が関わる社会事象には、中核となる事項＝知識が存在する。当然のことであるが、授業においてはそれが「学習内容」となる。まず、そうした問題解決の基盤となる学習内容を明確にすること、そして、それをしっかりと子ども達に身につけさせることが社会科における重要なねらいといえる。

また一方で、社会事象に主体的に関わるための「技能＝学び方」を身につけることも社会科における基礎・基本としておさえるべきものとなる。具体的には、見学の際のインタビューの方法や、インターネット閲覧など資料収集のための技能などである。さらには、自分たちで収集した資料や教師が提示した統計資料などを活用する力も身につけるべき学力といえる。

つまり、「学習内容の理解」と「調査する力・資料を活用する力」の双方が、社会科において子ども達が身につけるべき基礎・基本となる。

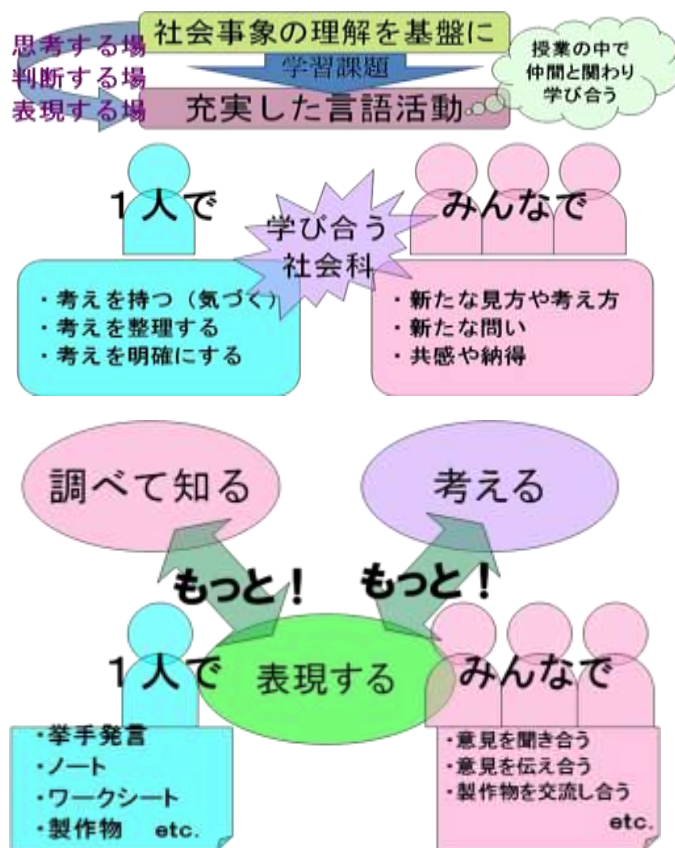


《基礎・基本を基盤に、言語活動を通して思考力・判断力・表現力の向上へ》

そうして身につけた基礎・基本（社会事象＝学習内容）の理解を基盤とした上で、そこに適切な学習課題を設定することで、子ども達の思考がスタートする。

その際、自らが考えたことや判断したことを仲間に「表現する場」を設定することで、子どもたちの思考に深まりがうまれる。

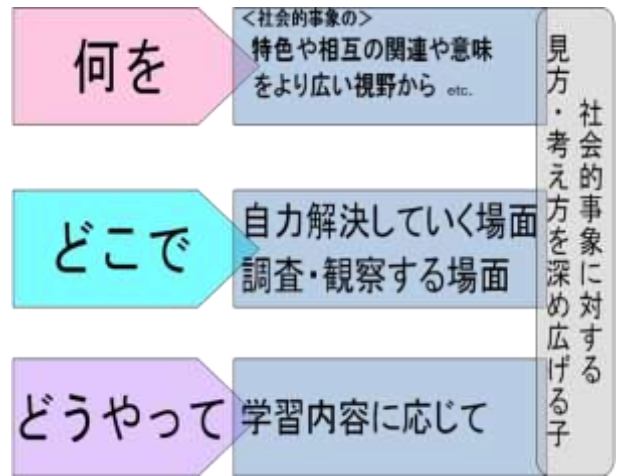
授業中の表現の場としては、「1人で」と「みんなで」それぞれの場面が考えられる。「1人で表現する場」には資料を読んで気づいたことをノートやワークシートにまとめる活動などが、また「みんなで表現する場」としては、挙手発言や交流場面がある。自分の考えをまずは個人として整理し、それをみんなで交流しあうことで、新たな見方や考え、次時への問い、さらにはもっと調べたい、もっと考えたいという学習意欲の向上が期待できる。



【視点2】問題解決学習を基盤とし、「課題意識（問題意識）」や解決への見通しをもち、「自ら考え伝え合う場」を具体的・効果的に設定した学習過程の工夫と1単位時間の評価の在り方

《課題意識と解決への見通しをもたせるために》

問題解決学習において、子ども達の社会的事象に対する「課題意識」を高め、学びの見通しをもたせるためには、教師自身が過程における各場面の目的を明確にする必要がある。ある1単位時間の授業において、「子ども達が思考する」場面を設定するとして、「何を」「どこで」「どうやって」という視点で整理が重要となる。そうした学習過程を繰り返すことで、子ども達が問題解決学習の流れを把握し、見通しをもって主体的に学ぶことが可能となる。



《社会科における1単位時間の言語活動の在り方》

社会科において子ども達が意欲的に言語活動に取り組むことができるかどうかは、授業に取り上げる資料がどれだけ子ども達の興味をひき、思考を引き出すことができるかによるところが大きい。

次の写真資料を例として考えてみる。

3・4年生社会科
「昔のくらしとまちづくり」
～昔の道具調べ～

りんごの害虫予防の道具は、どのように変化しているといえるだろうか？

上の写真資料は、3・4年生社会科「むかしのくらしとまちづくり」の昔の道具調べにおいて提示した余市町のりんごの害虫駆除の道具の変化をあらわしたものである。この資料からは、害虫駆除の仕事が、複数の人数で手作業していた時代から、1人で機械によって作業するように変化していることがわかる。

提示する資料が子ども達に学びのねらいに沿った気づきを生むものであるか検討が必要である。

またそうした気づきを言語化する際に、ノートやワークシートに記述するのか、または小集団や全体交流の場で発言するのか、明確にすることが大切である。

とりわけ社会科においては、考えを整理する際に「表やグラフ」にまとめるという活動も考えられる。教師は子どもが自分の考えを「どのような方法」で表現するか明確にすることが大切である。

